



教職大学院

Newsletter No. 126

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2019.10.19

附属特別支援学校に着任して思うこと

福井大学教育学部附属特別支援学校 副校長

小川 晶裕

はじめに、学校の紹介をさせていただきます。本校は、福井県下で最初の知的障害児を対象とした特別支援学校として開校しました。児童生徒数は、小学部、中学部、高等部と合わせて60名の小規模校で、アットホームな学校です。校舎外壁には、全国でも珍しい大きな壁画（題名：「平和の楽園」）が鮮やかな色彩で描かれており、この壁画が表現している「楽しくて暖かい夢の世界」を本校教育の象徴として、小学部入学から高等部卒業までの12年間を通した「生活教育」や全校児童生徒が縦割り集団で活動する「レインボータイム」を実施しています。

私は、4月に副校長として本校に着任しました。これまで小学校で勤務しておりましたので、6歳から18歳までの年齢幅のある子どもたちとの出会いは新鮮でした。本校は児童生徒数が60人と小規模で、一人一人に学校全体の目が行き届いています。教員は言うまでもなく、事務職員や警備スタッフまでが子どもたち全員の顔と名前を覚えていて、声かけをしています。保護者の方々も我が子だけではなく、朝、校門のところで出会う子どもたちに名前を呼んで「おはよう」「いってらっしゃい」と声かけをしてくださっています。この家族的雰囲気、とても素晴らしいと感じています。

私の学校運営のモットーは、「魅力ある学校づくり」です。子どもたちが通うのが「楽しい」と言ってくれる学校、保護者の皆様が「安心」して任せられると言ってくれる学校、そして学校の中に子ど

もたちや教職員、スタッフさんたちの「笑顔」があふれる学校をつくっていきたくて考えています。

着任から半年が過ぎ、少しずつ学校や子どもたちの姿が見えてくるようになりました。4月から毎日、校門で朝のあいさつをしています。最近は、「おはよう」と声をかけると、言葉や動作を返してくれる子どもが増えてきました。（と言うより）私の声かけに答えてくれていることに私が気づくようになりました。言葉で返さなくても目や唇の動きなどの表情、ちょっとした動作で答えてくれています。子どもの成長は早いと言われますが、毎日の生活の中ではさほど目立ちはしないものです。それでも、できたことを喜びながら子どもたちと一緒に一喜一憂していくなかで、確かな成長をみていきたいと思っています。

このような子どもたちの姿は、2011年に出版された「ゆっくりじっくりスローライフ教育 ー生活・手づくり・共同の12年で育つー」（かもがわ出版）で述べられています。以下に、当時の新聞記

内容

巻頭言	(1)
院生 自己紹介	(2)
インターンシップ/木曜カンファレンス報告	(3)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(6)
夏期集中講座を振り返って	(7)
教育研究集会のご案内	(10)
入試情報	(16)
スケジュール・編集後記	(16)

事を引用します。

『自閉症や発達障害、知的障害のある4人がどう育ち、どのように社会に巣立っていったのかを、当時関わった教諭が共同執筆。小中高三つの学部・の垣根を越えた教諭同士のつながりや、小学1年生から高校3年生まで全員が参加する縦割り班活動といった同校の取り組みの成果が、4人の成長の様子から伝わってきます。本書では、4人の歩みのほか、同校前校長の熊谷高幸教授や、松木健一教授ら福井大教職員のコメント、保護者の声も紹介しています。同校校長の森透福井大教職大学院教授は「障害の有無を問わず、子どもの持ち味や思いにじっくりと寄り

り添うのが教育の原点。この本は、教育とはどうあるべきかを投げ掛けた書でもある。多くの教育関係者や気がかりな子どもを持つ保護者の皆さんに読んでいただきたい」と話しています。』（2011年6月14日 福井新聞）

11月15日には、今年度の公開研究会を開催します。「分かる・できるを実感し、楽しさや喜びにつながる『運動』の授業づくり」をテーマに、公開授業やポスター発表、研究協議および講演が行われます。ゆっくりじっくり成長する子どもたちと、協働する教師たちの姿をぜひご参観ください。

院生 自己紹介



大野 豪 おおの ごう

今年度、福井大学連合教職大学院ミドルリーダーコースに入学しました、大野豪です。よろしくお願いします。東京都の板橋区立上板橋第二中学校で社会科担当、生活指導主任として勤務をしています。上板橋第二中学校は板橋区の指導力向上研究推進校として指定されていて、福井大学連合教職大学院に現職教員派遣という形でこういった学びの機会をいただきました。教員11年目で初めての経験です。板橋区では、福井大学連合教職大学院への教員派遣は今回で3校目となります。東京と福井の往復は想像以上に長く大変ですが、2年間頑張りたいと思います。

私は現任校に赴任して2年目になります。3年後、上板橋第二中学校は教科センター方式の学校になり、新校舎が完成します。自分の立場も昨年度から生活指導主任を任せられ、新しい挑戦がスタートしました。さらに、福井大学連合教職大学院での研修ということで、自分の置かれている立場と状況が一変しています。今までの教員生活において初めてのことばかりですが、自分が成長できる大きなチャンスだと思っています。私は今までこういった研修に参加をしたことはありませんでした。教材研究や校内の研究

授業は行ってきましたが、初任研など決められたものの以外は外部研修には参加をしてきませんでした。とにかく現場第一優先。当時は生活指導に追われ、学校を離れる余裕がなかったからかもしれません。そんな中、自分にとって転機が訪れます。3度目の異動で赴任した現任校が教科センター方式の学校になることで、福井大学連合教職大学院の話をしていただきました。今までの自分であつたらこの話は断っていたと思います。しかし、新しい学校をつくりあげていくことが求められる中で、自分の意識が今までとは変わっていました。自分が教職大学院で学んでいくことが上板橋第二中学校の学校づくりに必要だと感じたからです。生活指導主任という立場で学校の運営に関わることになったことも大きな変化でした。今まで自分の視点が“クラス・学年”中心であつたものが“学校全体”に変わりました。

私が福井で学ぶべきことは自分のスキルだけを磨くのではなく、教科センター方式という新しい学校になった上板橋第二中学校をどう運営していくか、その中で自分も含めて本校の各教員がどんな授業を実践していくのか、そして、3年後の上板橋第二中学校をどんな学校にしていけるかを教職大学院での学びを通して掴んでいきたいと思っています。

インターンシップ/木曜カンファレンス報告

インターンシップ報告

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/奈良女子大学附属中等教育学校 西澤 央泰

教員採用試験の準備に忙しかった前半が終わり、2 年目のインターンシップも後半に入った。現在のインターンシップを行うにあたって、根底にあるのは、夏休みの集中で突き付けられた「君には教師としての自己像がない。」という鮫島先生からの言葉である。この時は、ピンと来なかったが、先生の説明と Cycle 1 で読んだデボラ・マイヤー著『学校を変える力 イースト・ハーレムの小さな挑戦』で言及されていたデボラの教育の目的である「民主主義」を実現することのできる人を育てるために、デボラが行っている 5 つの「思考の習慣」への言及によって、自分には、どのような生徒を育てたくて、そのために自分は教師としてどう行動するかということを明確に言語化できていなかったことを理解した。と同時に、それは無意識的に今まで自分が考えることを避けてきたものであることも分かった。自分は子どもたちにどのようなようになってほしいのだろうか。そして、そのために自分はどんな「教師としての自分」を目指しているのだろうか。自分が「教師としての自分」足りえるものとして、自らの 5 つの思考の習慣を設定した。それは、以下の 5 つである。

1. 何のためにするのか 2. 本当にそうなのか 3. それをするとどうなるのか 4. 相手は何を言いたいのか 5. どういう意味があるのか

これらは自分が今まで生きてきてできていなかったことであり、同時に自分が身につけたいと思っていることである。加えて、生徒たちが民主的な社会を構成する一員として将来生きていくために、習得が必要なことであるとも考えている。これらの項目はこれで決定ではなく、これから先、自分が身につけたい「思考の習慣」は変化していくだろう。現時点では、まずは、これらの習慣を自分自身が獲得するためにインターンシップを進めている。これらの思考の習慣を常に意識することによって、子どもたちのためになる仕事ができると考えている。

この問いから、残りのインターンシップの時間は「子どもたちにどのようなことを獲得してほしいのか。そのためにはどのような授業をしたいのか。」

ということを考える期間にしようと考えている。他の人に比べればこの問いにたどり着くまでにかかなりの時間を要してしまったのかもしれない。だが、今の自分にはこの問いを考える準備ができていると思う。「どのような授業をしたいのか」については、散々悩んだ挙句に、「子どもたちが自ら英語で話したいと思えるような授業づくり」をしたいと思うようになった。そのために現在は、授業観察を通して、英語の先生方が授業中にどのような課題を与えておられて、その課題に対し、子どもたちはどのように反応しているのか、その反応に対し、先生はどのような返答をして、子どもたちがもっと英語を話したいという気持ちにさせているのかを観察させていただいている。

中学校教員としての専門性を高めるために、この 2 学期から、主として入らせていただいている学年を、4 年生（高校 1 年生）から 2 年生へと変更した。これまで入らせていただいていた 4 年生とは、私が教職大学院に入学する前からつながりがあり、子どもたちの中に入っていくことも容易であったが、2 年生とは全くつながりのない状態でのスタートとなる。1 か月間、2 年生と共に過ごし、4 年生との学年集団との雰囲気の違いを実感している。4 年生は自分から話しかけてくれる子どもが多くいたが、2 年生にはそれが少なく、私を警戒しているようにも見える。これまでは先生方や子どもたちのおかげで子どもたちとつながりを作ることができてきた。今度は自分の力で子どもたちとつながりを作っていくことを試されているのかもしれない。自ら子どもたちに働きかけながら、子どもたちと先生とでどのような学習集団が形成されているのか、その背景にはどのような取り組みがなされているのか。夏の集中 Cycle 2 で学んだ『コミュニティ・オブ・プラクティス』、『学習する組織』の 2 つを参考に、自分ならばどのようにして学び続ける学習集団を作っていけるかを考察していきたいと思う。

大学院生活も残り半年を切った。来春から教員としてスタートラインに立つことができるようにする

ために、現状に常に問いを持ちながらインターンシップを進めていきたいと思う。

よく遊び、よく学び、子どもと生活をつくる

授業研究・教職専門性開発コース2年/奈良女子大学附属小学校 藤田 若奈

「あの先生、だれ？」

「あの先生はな、ぼくたちを見守ってくれてるねん。」

夏休み前、ある子どもが私のことをこのように紹介していた。そうか、今の私はこの子たちにとって見守り役なわけだ。それもそのはずである。私は、週に一度、学校に来ては教室の隅っこに座って、授業の様子を見ているだけだったのだから。これでは参観者と変わらない。何もしないまま、時間だけが過ぎていく。何もしないから、何も起こらないし、思考もなかなか動かない。平和だが、どこかつまらない毎日を送っていた。これではだめだとわかってはいても、頭は採用試験のことでいっぱいだった。

月日は流れ、苦しい採用試験も終わり、夏休みが明けた。私はこれまでの時間を取り戻すかのように、空いている時間を見つけては子どもたちのもとへと向かった。休み時間には校庭へ出かけ、タイヤ跳びやサッカー、鬼ごっこに電車ごっこ、全てのことに全力で遊んだ。するといつの間にか、隣のクラスの子どもたちからも「藤田先生、鬼ごっこしよう！」と声をかけてもらえるようになった。子どもたちとの距離が、ぐっと近づいてくるのがわかる。これまで子どもたちと私との間には線が引かれているように感じられたが、私は今、その線を飛び越え、子どもたちもまた私を中に入れてくれようとしている。ところが、距離が近くなった故なのか、悩みの種もまた増えることになるのであった。

Nくんという男の子。夏休み前、動かない私のもとへたびたび訪れ、話しかけてくれた子だ。その子が、夏休みが明けてしばらく経ったころ、目が合うと私に殴りかかるようになった。その行動は日に日にエスカレートし、通りすがりにたたかれ、帽子をまとめて投げつけられ、飛ばした上靴が顔面に直撃し、沢山暴言もはかれた。私がこれまで生きてきた中でも、なかなかひどい仕打ちを受けていた。なぜここまでエスカレートしてしまったのか。それは、私に迷いがあったからだ。このような攻撃的な行動は今すぐにでもやめさせたい。一方で、私に叱られることを彼は喜んでおり、彼のようなタイプはますます悪循環を生みかねない。葛藤している間も、彼

の暴言や暴力は続いている。教師に迷っている時間はない。今すぐに彼の行動に伝えていかなければならなかった。メンターの先生の助言をもとに、私は声を荒げることなく、落ち着いた調子で「Nくん、先生はNくんがこうやって先生のところに来て話しかけてくれるのが嬉しいよ。でもね、殴られるのは痛いし、そんなことを言われると悲しいし、嬉しくない。」と彼に伝えた。彼は聞いてくれたが、今もまだ彼の行動は続いている。

Nくんは決して私をいじめよう、のけ者にしようとして攻撃をしてくるのではない。攻撃した後、Nくんはにこにこ可愛い笑顔をこちらに向けて、私のことをじっとよく見ている。自分に注目してほしい、何か反応がほしい、そんな眼差しである。他の友だちに対しても、彼はこのような行動を繰り返している。そして、「Nくんにたたかれた！」とめめごとに発展していく。Nくんの様子をしばらく見てきたが、彼にとって暴言や暴力はコミュニケーションの一つになっているように思う。嬉しいときも、怒っているときも、彼は暴言や暴力を使ってそれを表現する。これらをふまえて、Nくんに応じていかなければならない。Nくんの思いを受け止めながら、暴言や暴力に代わるコミュニケーション方法を少しずつ覚えさせていく。これが、今のNくんにとって必要なことなのだと思う。

いよいよ、2年目のインターンシップもおもしろくなってきた。以前の私なら、子どもからの暴言や暴力にいちいち落ち込んでいたかもしれない。けれども、今はそんなことよりもまず「子どものために、私にできることをしよう」と、そのように思い、行動することができるのである。少しずつ、でも着実に「教師の私」に近づいているように感じられる。それも、現場で学ぶインターンシップのおかげである。

インターンシップは、ただその場にいるだけでは何も学べない。2年目で、それがよくわかった。まずは、子どもたちの中に溶け込み、子どもたちとともに生活をつくること。そこから、子どもたちとの物語が生まれていく。大変だけれど、やっぱりおも

しろいなあ、と思う。残りの数か月を大切に過ごしたい。そして、教師を志す多くの人に、このインタ

ーンシップのおもしろさを味わってほしいと願う。

ねらいにまっすぐに向かうこと

授業研究・教職専門性開発コース 2年/福井市明新小学校 津野 慎平

令和初のインターンシップや週間カンファレンスが、気付けば半期を過ぎ、残り半分を終えようとしています。私の感覚的には、考えさせられることが多く「まだ、1年じゃないのか」という気持ちでいる一方で、来年から社会に出ていくことを踏まえれば「短すぎて大丈夫かな」という気持ちでもあります。今回、考えさせられたことの中で、特に私にとって大きな気付きにつながったものを整理するとともに、紹介できればと思っています。

半期を通して、私にとっての大きな気付きは、「ねらいにまっすぐに向かう」ということです。「ねらい」と言うのは、自分のやりたいことであったり自分の理想であったりなどの向かうべきゴールのことです。自分が「ねらい」をしっかり持ち、まっすぐに向かうことで自分を見失わないようにする。これが簡単そうに見えて、行動にするととなると如何に自分ができていないかという部分に、私は半期を通して気付けたかと思っています。

「ねらいにまっすぐに向かう」これを考える発端になったのは、思い出してみると福井大学の学部生のときに受けていた授業だったように思います。今でもティーチングアシスタントとしてお手伝いさせてもらっている授業なのですが、その中では、子どもと大学生が一緒に集まり、余暇活動を行う組織の活動の会議について学生同士が話し合い、教授にアドバイスをもらうということを行っていました。学生同士が「組織がどのようにあるとよいのか、そのために会議がどのようにあるとよいのか」と話し合うテーマの中に「活動を考える会議の際に、内容を先に考えるか、ねらいを先に考えるか」というものがありました。当時の私ははっきりと分かりませんでしたし、これを考える機会は今後ないとも思っていました。

授業研究・教職専門性開発コースに入学した私は、長期インターンシップの中で最初、特別支援学級に入らせて頂くことになりました。最初、私は「何となく」子どもと関わり、「何となく」授業実践を試みたりしていました。今考えれば、そのときの私

は活動の内容ばかり考えて、「ねらい」の部分が分からず、「何となく」という言葉で表現していたように思います。メンターとして担任してくださった先生方やそのときにいらっしゃった先輩は、「何がしたいのかわからない」「何がしたかったのかわからないから、どう見ればよいのかわからない」と言いました。それを聞いた私がどうすればよいのか分からなくなると、先輩は「自分は子どもにどうなってほしいの？」と自分の「ねらい」を引き出そうとしてくれたり、メンターとして担任してくださった先生は「私だったらこうするよ」と参考になる考えを教えてくれました。それらを通して、「ねらい」を持つことは、自分を見失わないようにしたり、行き当たりばったりで不安定な子どもへの思いばかりにならないようにしたりするためにも必要なことであると気付きました。「ねらい」を持つことの必要性に気づけた私は、普段何気なく見ていたインターンシップ先の学校行事の計画書や研究授業の指導案を改めて見直してみました。すると、授業だけでなく学校行事や活動などは全て「ねらい」があってそれに向かう内容があること、それに関する会議においても「ねらい」を踏まえた上でどうすべきかを話し合っていることに段々と気づくことができました。

「ねらい」に少しずつ気付いてきた私は2年目になると、週間カンファレンスの企画を周りの2年目や3年目の先輩の人と協力して行うことになりました。その中で私は、自分が週間カンファレンスの意義を見失わないように、「週間カンファレンスを通して自分たちがどうなっていきたいのか」という「ねらい」を踏まえたうえで、「どのような内容があるとよいのか」ということを考え、企画を行っていました。しかし、思うようにはなかなか上手くいきませんでした。「ねらい」はあっても、人の認識はそれぞれ違うので上手く伝わらなかったり、余計な要素が多くて混乱させてしまったりと「内容」が上手くいきませんでした。しかし上手いかわからないことばかりではありませんでした。「ねらい」を考えてい

た分、何が良くて何が悪かったのかという部分が自分でも少しずつ気付けるようになっていきました。

今私は、特別支援学級から2年生の通常学級に長期インターンに入らせてもらっています。その中で、徐々に授業実践もさせてもらっています。夏休み直後に道徳の実践をさせていただきました。私は、教科書を参考に「ねらい」を定め、「ねらい」のために使えるものは多く使おうと思い、授業の中で様々な教材を使い、数多く発問しました。最初は、若い先生が授業してくれるということで挙手する子どもも多くいたのですが、段々と発問が重なるにつれて挙手する人数が減り、最後には全員がポカーンとしていました。授業が終わったあとにメンターの先生が「ねらいにはまっすぐに向かわないと子どもたちに伝わりづらくなって、分かりにくいよ」と教えて下さいました。子どもたちにとっては、様々な教材

や発問に出会い過ぎて、その教材や発問が「ねらい」に対してどうつながりを持っているのか処理しきれず、分からなくなっていたのです。大人の自分にとっては「まっすぐに」向かっているように見えても、子どもにとってはつながりが見えず「まっすぐに」見えない、そのためどこに向かっているのか分からない。このとき、私は「ねらい」に「まっすぐに」向かうということが如何に難しいかを痛感しました。

私は「ねらいにまっすぐに向かう」ことの重要性に気づけたことから、これからはどうすれば「まっすぐに」向うことができるのか、「ねらい」を見失わずにできるのかを、長期インターンシップや週間カンファレンスなどを通して、考えていければと思っています。

ミドルリーダー/マネジメントコースだより

学び続けること

ミドルリーダー養成コース2年/北陸高等学校 中嶋 旬子

教職大学院での学びも2年目となり、今年は余裕を持ってラウンドテーブルや合同カンファレンスに臨むことができるだろうと思っていましたが、全くそのようなことはなく、1年目とはまた違った気づきや迷いや課題が浮かびあがり、試行錯誤の日々を送っております。カンファレンスに参加したての頃は、職種も年代も違う先生方の実践を聞くことがどのように自分の学びに繋がるのかわかりませんでした。お話を伺う先生方の実践から、自分の実践にすぐにでも活かせるような手がかりを求めています。対話よりもむしろ、素晴らしい教授法や上手くいく技法を教えてもらえるような講義スタイルを望んでさえいました。しかし、回を重ねるごとに、互いの学びの深まりには、実践の歩みを問い直そうとする語り手と、その展開から学び取ろうとする聴き手が集う場が必要なのだと、徐々にわかってきました。ラウンドテーブル、カンファレンスでは、講義スタイルでは到底味わえない、感銘や影響を受け、想いを共有し、自身の実践をふりかえり、見つめ直し、

そしてまた新たにアイデアや疑問が浮かび、学びのスパイラルが自分の中で巻き起こっている実感があります。

新しい学習指導要領の下での「学び」はどうあるべきか、どのように授業を改善していけばよいか、共通テストに向けた指導をどうするか等、悩み模索している中、北陸高等学校のグローバルチャレンジプログラムで、生徒を引率し、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)に行くことが決まりました。研修では、ディスカッションを通し、自分の意見を英語で述べ、同時に仲間の意見や現地大学生のアドバイスも受け入れ、問題に対する理解を深めます。自分を表現するスキルを演習していくセッションを積み重ねるうちに、グローバル人材を育成するための教師の役割について考えるようになりました。学びに限界なんてない、子どもたちとともに、成長し続ける教師になろうと考えるようになりました。今までの固定的マインドセットから、成長的マインドセットで前向きに挑戦しようという考えが変わって

いきました。英語がわかれば視野が広がり、世界の最新の動向もわかり、その中で自分が何をすべきか考えることができます。同時に自分の日本理解を深め、日本語力を高め、多種多様な人間に対する共感力・

理解力を深めることができる。知的好奇心を刺激するような授業、志を高く持って挑戦する楽しさを味わい、人間力を高められる授業を目指す決意を新たにしました。

夏期集中講座を振り返って

夏の集中講座を終えて

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井市中藤小学校 森本 希美

3年目の夏が始まり、9日間の夏の集中講座を終えることとなった。この時期になると、今までの自分の実践を改めて問い直す機会を持つことができている。

今年の cycle1 では、長期にわたる学習の展開とそれを支える教師の実践という内容のもと、福井大学教育学部附属義務教育学校の「福井発 プロジェクト学習」を読んだ。義務教育学校の学びのデザインを通して、自分の実践を見つめ直していた。学習によって成長していく子どもたちの姿は、自分の授業実践では保証することができていたのか、子どもたちが自分事として捉えられる授業のデザインを考えることができていたのかを考えると、まだまだ改善点がみつかる自分の実践であった。改めて、授業とはなにかを考えさせられる機会であった。

Cycle2 では、ピーター・M・センゲの「学習する組織」を読んだ。私のコミュニティであった去年の木曜カンファレンスを運営していたM2の頃を思い出していた。自分たちが失敗や成功を繰り返しながらもみんなで考えていた時間は、組織自体がよりよい木曜カンファレンスを作りたいという高い意識を持っていたからこそ、どうやったらみんなが有意義な

時間になるかを考えるとともに、お互いに学び合えるような学習する組織に近づくためのものになっていたのではないと思う。1年目の頃は、自分自身の経験が少なかったのもあり、cycle2 で読んでいる書物が難しく、苦戦していたように思う。しかし、自分たちで考えて実践する場があり、様々な経験をさせてもらっているからこそ、年を追うごとに、少しずつイメージしながら読み進めることができたようにも思う。また、この書物を読み進める中で、お互いの経験をもとに、捉え方を共有する時間があるからこそ、1年目より理解が進んでいるように感じている。

Cycle3 では、cycle1、2 の6日間の書物を通して学んだことを生かしながら、3年間の実践を振り返りながら、捉え直した。3年間はあっという間で、自分の実践をまた捉え直すことで、価値づけすることができるようになった。

自分で書物を読むだけではなく、自分たちの経験を語り合うことで、見えてくる自分なりの答えがみつかった9日間の夏の集中講座だった。夏の集中講座で捉え直したことを考え、生かしながら残り半年間の院生として学べる時間を大切にしていきたい。

自分の中にある「省察」を捉え直す

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井市明新小学校 竹内達郎

夏期集中も3年目となり、ようやく要領をつかめてきたような気がしている。Cycle 2では、これまで組織的な視点に関する書物を読み、コミュニティを発展させていくための視点について考えてきたが、今回自分は、「省察的实践者の教育」(ドナルド・A・ショーン《柳澤昌一・村田晶子監訳》, 鳳書房, 2017)を読み進めていった。自分はこの大学院で長期インターンシップの活動を中心に行ってきたが、そこで活動の中心の一つに「省察」があった。この省察については、たびたび院生の中でも方法や考え方について話しあっているが、確定的な意味をつかみきれてはいないと感じている。「省察的实践者の教育」を読む中で、この「省察」という活動についてとらえ直し、これまでの自分の活動そしてこれから半年間の活動について見つめなおす機会としていきたいと考えた。

この書籍の中で特に印象的であった部分は、省察的学習者を養うための教師と学生の立ち位置についてである。学生は、入学した当初、状況把握能力や問題に対処するための方法については知識を持ち合わせていない。それに対し教師は、様々な知識や技術を持ち合わせている。この資料の中では、教師がその知識を学生に教えるだけでは技術的合理性の中にある教育だとして、省察的な見方はできないとしている。その中で、教師側のスタンスとしては、学生がもがき混乱する経験を保証していくことが必要であるとしている。このスタンスは、本教職大学院の考え方そのものであると感じた。自分のようなストレートマスターは長期インターンシップに参加しているが、4月インターンの学校へ行った際は、本当に何をすればよいかについて具体的に示されていなかった。取り組む内容も限定されていない中で、自分なりにやっていく活動ははじめとてもつらく感じていた。しかし行っていく中で、少しずつ自分なりの見方やスタンスを築いていくことができていったと感じる。

その活動の中で、見方を広げるための教示の必要性についても書かれていた。しかし、ただ解を与えるだけではなく、話し合う中で様々な見方を持つことができるようにしていくことが求められるとしていた。ここも、大学院における先生方のスタンスとあっているのではないかと感じた。インターン先で

あったことなどに対して、しっかり聞いたうえでそこに沿った先生方の経験やアドバイスを聞くことができる。大学院での環境を考えると、このように省察的实践者を養っていくためのシステムが整っているのだと改めて感じた。その中で、学習者がどのようにそのスタンスを受け入れるかによって価値が変わってくるのだとも感じた。

学習者が持つべき要素としては、自分自身で考えていくことがあげられていた。その点を考えてみると、受け身的な部分もあったように感じてくる。特に授業実践を行うときに受け身になりやすく失敗した経験があった。授業を考える際に、自分なりに子供の普段の様子を照らし合わせて行っていく。しかし、うまく思いつかない時は先生方に相談をしている。その中で先生方が考えた展開などを示してもらうと、それをそのまま反映させて行なってしまったことがある。すると、今一つ子供の意見が広がらず停滞した授業になってしまった。おそらく、代案を示した先生が行うと、うまく意見を拾いながら展開させていくことができたのだろうが、その技術が自分になかったためにうまくいかなかった。また、その活動内容にした意図についても明確ではなかった気がする。資料の中にある知識がない状態での模倣にあたると感じた。常に考えていく姿勢を今後も継続して行っていきたい。

自分は、今回この資料の中から、自分の省察について捉えなおしてみた。今自分が行っている省察は、大半が活動を行った後に振り返り、客観的に省察している場面が多かった。しかし、現場に出てからは「行為の中での省察」も重要になってくると感じた。授業や子どもとの関わりの中で起こる問題について即時対応していくこと、その技術を身に付けていく必要性を強く感じた。それを養うためには、大学に戻ってからの省察ももちろん大切であるが、インターンの中で自分の行動やメンターの先生の行いについてその場で考え省察していく。この意識を共に持つことで少しでも臨機応変に対応する力がついてくのではないかと考える。また、3年間の学びを総括していくためにも、これまで以上に長期的な面を視野に入れた省察も必要になってくる。残り半年、記録や語ることによる省察に加え、常に考える意識を大切にしながら学びを深めていきたい。

長期的に捉える

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井市明新小学校 日野 晶

最後に過ごした夏の集中講座。今回は私にとって長期的に広く捉えることの意義を再度考える機会だったように思う。これまで過ごしてきた忙しい時、嫌なことがあった時、なにもかも投げ出したいくなる時、そんな壁にぶつかるような時は一瞬にすぎないということを実感した。私の“成長”はその一瞬に目を向けるのではなく、これまでの人との関係、経験など今までの中から築いてきたものである。以下、夏の集中を通して考えたことを記していきたい。

Cycle1 では、「学びを拓く《探究するコミュニティ》」の第6巻となる「専門職として学び合う教師たち」を選択し、読み進めた。このことから、「プロセス（筋道）」が物事の価値を生み出し、“学習し合う”ということは、初めから答えがわかっている問題に取り組むことではなく、新たな価値や知識を得ることのできる「探究型」の学習から展開されることだと考えた。その中で、「探究するコミュニティ」はお互いの学習プロセスとなる過程を知り、「対話」へと展開されることで学習していく“学びのサイクル”となる。“学びのサイクル”は個人によるサイクルが集団、組織、と集まり織りなしていくことで、組織として存在するためのサイクルを描く。サイクルは長期的なビジョンのもとに成り立っており、長期的なサイクルは新たな価値を見出しながら展開されていく。“探究”はつねに次の展開がある流動的な活動である。

Cycle2 ではこれらを踏まえてピーター・M・センゲによる「学習する組織」を読んだ。変化の激しい社会に対して、複雑な問題と向き合うべく求められていることは、特別なパワーを持った超能力者でもなく、偉大な総理大臣でもなく、大金持ちでもない。目的に対して相互作用を行いながら常に再生し続けることのできる“学習する組織”である。何事も新たなものを創造したり、価値を見出したりするには個人では限界がある。集団の中で関わり合い、そのような組織を形成することで100%を超える良いものができることだってある。しかし、同時に集団から織り成す組織は時に学びが生まれにくいような環境さえになり、個々の自発性を押さえつけて、非常にややこしい集団となり破滅へと向かっていくこともあると思う。そこで、組織は常に“学び合い”ながら再構成し、「可能性」を創り出すことのできる組織

が維持されていくことが重要になってくる。本書全体の中で、私が特に重要だと捉えた点は「長期的なビジョンをとらえる。」ということであった。組織においても個々が長い展開を捉えた上で、自身の立場（影響）を考えることが“学習する組織”として常に再構成されながら展開していく。ここでいう「長期的なビジョン」とは時間的にも、空間的にも大きな相互関係を把握することだったのだと思う。また、「長期的なビジョン」とは、単発的なジグザグな展開ではなく、渦を巻いたようなサイクルを重ねた展開における展望のことだと考えている。「探究するコミュニティ」とは、つねに時間をかけながらサイクルを重ね長期的なビジョンに向かって模索し合い、学びあっていく。つまり、長期的なビジョンが軸となり、その周りをサイクルが渦をなして巻く。この中でつねに私たちは長期的な時間の流れを認知していることで価値に繋がる。じわじわと展開される長期的な歩みにおいて、長期的なビジョンを共有していきながら、見失ってはいけないのだと考える。

これらのことを考えていた時、前にある先生から「相手は自分にとって氷山の一角に過ぎない。」と言われたことを思い出した。組織として常に再構成していく過程では、自分とは違う思いや経験をしてきた人たちとの関わりが必ずある。その関わりから生まれる「探究するコミュニティ」はつねに“学習する組織”として存在する。「長い目」で物事や組織を捉えた時に、自分の存在、与える影響、をつねに考え、展開を導いていくことが大切であると強く思う。ただ目の前に存在する課題は、長期的な問題が基底となって張られた根の一部にすぎないのかもしれない。自分の中で、長期的なビジョンを持って物事をとらえること、時間を恐れないこと、自分が主役の世界ではなく、道に敷き詰められたレンガの一つにすぎないこと、組織の一員として今後も存在していること、意識しなくてはならないことはたくさんある。しかし、つねにプロセス（過程）から価値を問い、考えを捉え直し、更新していくことは私自身忘れずにしたい。組織を動かすのではなく、私が動くことに意味がある。問題を相手から見つけるのではなく、全体的なシステムに目を向ける。自分が相互作用で関わっていることを忘れない。

長期的に捉えるようになり、物事の見え方が大きく変わったように思える。断片的な展開だけでは物事を判断することも相手を理解することもできない。今まで納得いかずに腹が立っていたようなことも、

この夏を終えて長期的に捉える考えの価値を知って、問題はそこではないと思うようになってからそこまで腹が立たなくなったので不思議である。

教育研究集会のご案内

※詳細については、各学校のHP等でご確認下さい。

11/9（土） 福井大学教育学部附属幼稚園 幼児教育研究集会

令和元年9月吉日

各位

福井大学教育学部附属幼稚園
園長 濱口由美

第29回幼児教育研究集会のご案内

兼 福井県幼児教育支援センター市町幼児教育アドバイザー養成研修

初秋の候、貴台におかれましては益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素より、本園の教育活動に温かいご指導、ご支援をいただいておりますこと深く感謝申し上げます。

さて、本年度、下記の通りに「第29回幼児教育研究集会」を開催いたします。ご多用の折とは存じますが、多数の皆様のご参加とご指導をいただきたくご案内申し上げます。

新たな時代に向かえたこの時期に、学校教育のスタートである幼児教育に携わる先生方だけでなく、小学校、中学校、高等学校の先生方と共に、18年間の学校教育、そして、生涯にわたる学びについて、聴き合い、語り合い、学び合うことができる機会になればと考えております。多数の先生方のご参加をお待ちしております。

1 研究主題

つながりが育む学びの深まり

～試す、工夫する、つくり出す遊びを求めて～



2 期 日

令和元年11月9日（土）

3 会 場

福井大学教育学部附属幼稚園

〒910-0015 福井市二の宮4丁目45番1号

TEL 0776-22-6687 FAX 0776-22-6718



4 日 程

8:50	9:15	11:20	11:30	12:15	13:00	14:20	14:30	16:30
受付	公開保育 好きな遊び みんなの時間 障園前のひととき	休憩・移動	全体会	昼食	年齢別分科会	休憩	リレーシンポジウム 無藤 隆 先生 秋田 喜代美 先生 松本 健一 先生 岸野 麻衣 先生	閉会

5 内 容

●公開保育(9:15~11:20) 各保育室および園庭(雨天時 遊戯室)

●全体会(11:30~12:15) 遊戯室

研究概要説明

ご基評(本日の保育について) 無藤 隆 先生

●年齢別分科会(13:00~14:20)

学年	3歳児(すみれ・ゆき)	4歳児(ばら・もも)	5歳児(ほし・つき)
保育者	牧田 祐子 野路 直美 ツシマ 由佳	高橋 浩美 上田 晴之 廣瀬 友加里	坂ノ上 忍 笹川 英理 宮崎 秀子 野坂 智子
指導助言・研究協力者	永神 厚子 先生 (県幼児教育アドバイザー) 森尾 恵理 先生 (市幼児教育アドバイザー) 前田 祐子 先生 (仁愛女子短期大学附属幼稚園 主事) 森 透 先生 (福井大学連合教職大学院特命教授) 荒木 良子 先生 (福井大学連合教職大学院准教授) 船谷 友代 先生 (福井大学附属特別支援学校教諭)	高間 佳子 先生 (福井市保育専門官) 山下 清美 先生 (県幼児教育アドバイザー) 梅田 英美 先生 (南徳幼稚園 園長) 岸野 麻衣 先生 (福井大学連合教職大学院准教授) 八田 玲子 先生 (福井大学附属高等学校教諭)	青木 英恵 先生 (福井県義務教育課 指導主事) 観 寿子 先生 (福井市立幼稚園 指導主事) 細田 光恵 先生 (福井市立北部保育園 園長) 西東 真樹 先生 (福井市立鶴岡幼稚園) 加藤 正弘 先生 (福井大学連合教職大学院准教授) 栗田 英香 先生 (福井大学附属義務教育学校教諭)

●リレーシンポジウム(14:30~16:30)

テーマ 『 つながりが育む学びの深まり』

～試す、工夫する、つくり出す遊びとは～』

無藤 隆 先生
白梅学園大学大学院
特任教授秋田 喜代美 先生
東京大学大学院
教育学研究科長・教育学部長松本 健一 先生
福井大学 副学長岸野 麻衣 先生
福井大学連合教職
大学院 准教授

6 参加申し込み

●申し込み期限 令和元年11月1日(金)

●参加人数 180名 (定員になり次第、締め切らせていただきます。)

●年齢別分科会について

年齢別分科会は、ご希望の学年をご記入ください。決定した分科会は、当日の受付にてお知らせします。人数の調整をさせていただきますので、どうぞご了承ください。

●申し込み方法

ホームページ内の「参加申し込みフォーム」よりお申し込み下さい。
申し込み完了後、入力いただきましたメールアドレスへ、申し込み完了メールを送信します。当日は、受信したメール画面を印刷したものを必ずご持参ください。なお、電話、Faxによるお申し込みは受け付けておりません。なお、気象状況等により急な変更が生じた場合には、ホームページでお知らせいたします。届着後前日にホームページをご確認ください。

7 参加費

2,000円(資料代含む)

8 その他

●昼食について 1,000円(お茶代含む)

ご希望の場合は、参加申し込みの際に「弁当希望」の欄にチェックをしてください。当日受付にて代金と引き替えに「弁当券」をお渡しします。昼食時には、弁当券を引き替えにお渡ししますので、紛失にご注意ください。
尚、それぞれの研究会の申し込み期日を過ぎますと、弁当の申し込みはできませんので、ご了承ください。

●駐車場について

収容台数に制限があります。公共交通機関をご利用ください。
自家用車でお越しの場合は、乗り合わせをお願い致します。

11/15（金）福井大学教育学部附属特別支援学校 公開研究会

福井大学教育学部附属特別支援学校

令和元年度

「公開研究会」のご案内

(兼)第59回全国学校体育研究大会
福井プレ大会 特別支援学校部会

全体研究テーマ

分かる・できるを実感し、楽しさや喜びにつながる

『運動』の授業づくり (1年次)

期日 令和元年 **11** 月 **15** 日 (金)

会場 福井大学教育学部附属特別支援学校



ごあいさつ

古代ギリシャの哲学者プラトンはその名著『国家』の中で、あらゆる教育において最も基礎となるべきはムーシケー（詩と音楽、music）とギムナステイケー（体育、gymnastics）であると述べています。子どもたちの教育は、まず音楽（美しい詩を歌うこと）によって心（魂）をより美しく豊かなものにし、体育（運動）によって肉身をより美しく調和のとれたものとするところから始めなければなりません。美しく調和した心と肉身が備わってこそ、教育はその次の段階としての言葉や徳を学ぶことへと進んでいくことができるというわけです。

体育（運動）とはそれほど重要なものですが、それほどのように教えられるべきなのでしょう。どんな教育についても言えることですが、そこではまず子どもたちが喜びを感じられるようにしなければなりません。運動が効力、できるようになることを通して子どもたちにワクワクするような楽しさと喜びを体験させてあげなければなりません。

それでは本校のような特別支援学校においては、どのような『運動』の授業づくりをすれば良いのでしょうか。これが今回の「公開研究会」のテーマとなるかと思えます。

お忙しいこととは存じますが、是非とも多くの方々にご参加いただき、貴重なご助言・ご指導を賜りたく、ご案内申し上げます。

令和元年9月 福井大学教育学部附属特別支援学校 校長 坂田 登

共催／福井県学校体育研究会、
後援／福井県教育委員会 福井市教育委員会 福井県特別支援学校教育研究会、

令和元年度 公開研究会

日程

9:30	9:40	10:30	12:00	12:40	13:30	14:00	15:40	16:30
受付	公開授業Ⅰ 9:40～10:40 (小学部)	公開授業Ⅱ 10:50～11:50 (中学部)	ポスター発表 12:40～12:55 1 12:40～12:55 2 12:55～13:10	全体会Ⅰ 13:20～13:50	学部研究会 14:00～15:30	講演 15:40～16:10	全体会Ⅱ 16:10～16:30	

授業公開

学部	活動形態	活動名	指導者名	場所
小学部	運動 (20分びタイム)	みんなでつくろう！ボールゆうえんち	加納佳晃 芝 智美 船谷友代、 菅原裕子 島田雅佳 竹内 睦、 山田美里 寺田哲也 表阪香織	体育館
中学部	運動	新聞紙を使って体を動かそう	天方和也 松山千夏 篠田英美、 山口真生 小黒英輔 園谷照恵	体育館

全体会Ⅰ

挨拶 校長 坂田 登 学体研副会長 竹野 誠司

研究概要説明 学体研研究員 藤原 美奈子 本校研究主任 久保 文

学部研究会

学部	協議内容
小学部 提案：芝 智美 司会：船谷友代 記録：表阪香織	体育やその他の教科、自立活動などの視点を盛り込んだ「運動」の活動内容や評価のあり方、また、子どもの自己評価を促し、活動への意欲を高める支援や振り返りについて、事例を交えながら協議する。
中学部 提案：小黒英輔 司会：広瀬真子 記録：篠田英美	生徒が主体的・対話的に取り組む「運動」を目指すための教師による活動の構想・支援と、その学習過程の中で生徒が学びを深めていく姿を教科の視点を踏まえながら、どのように期待し、それを捉えていくかを協議する。
高等部 提案：平泉剛代 司会：菅原重由美 記録：尾上 愛	自立活動と体育を融合した「朝の運動」において、自立と社会参加に向けて、心身の健康と生涯運動に関わろうという気持ちを養うための教材や教師の支援、環境設定などについて、事例と実践の2つの視点で協議する。

ポスター発表

掲示物は、体育館に終日掲示してあります

氏 名	テーマ
小学部 菅原裕子	運動や遊びの時間を通して、意欲や自信を高めるために、
小学部 島田雅佳	人との関わりを通して、分かる楽しさやできる喜びにつながる取組
中学部 松山千夏	活動理解を目的とした話し合いについて
中学部 園谷照恵	苦手意識のある活動への参加に向けた教師の支援や対話について
高等部 滝波雅文	子どもの思いを大切にした高等部「朝の運動」の取り組み
高等部 船谷裕之	高等部「朝の運動」の実践の振り返り
高等部 菅成成樹	高等部「朝の運動」の実践のボール運動コーナー
高等部 伊藤はる香	高等部「朝の運動」の実践のニュースコーナー
高等部 伴村孝子	千里の道も一歩から！『足育』に注目した体づくりの実践
義談教諭 加藤真由	

講演（指導助成も含む）

「生涯スポーツにつながる特別支援教育の体育・スポーツ」

東海大学体育学部体育学科 教授 内田 匡輔 氏

講師プロフィール

経歴

筑波大学大学院体育研究科修士課程修了 筑波大学附属豊学校（現在は聴覚特別支援学校）教諭、筑波大学附属中学校教諭、東海大学体育学部体育学科講師、准教授、現在は東海大学教授。

専門研究

教科教育におけるインクルーシブ体育、特別支援学校の「良い」保健体育実践、体育・スポーツのダイバーシティ

主な論文・著書

体育科教育入門、バリアフリーをのぞく体育授業、特別支援教育時代の体育・スポーツ、教員としてのアダプテッド・スポーツ等。

全体会Ⅱ

全体助言 福井大学大学院 連合教職開発研究科 准教授 新井 豊吉 氏 挨拶 副校長 小川 晶裕 氏

研究助言者・研究協力者

全体研究助言者	
内田匡輔 東海大学 体育学部体育学科 教授	
新井豊吉 福井大学連合教職開発研究科 准教授	
各学部研究助言者	各学部研究協力者
小学部 小黒真子（福井大学連合教職開発研究科 客員教授）、 麻澤愛子（福井大学連合教職開発研究科 准教授）、 王澤良美（福井県教育庁高校教育課 主任）	室田正志（福井県立福井特別支援学校 教諭）、 牧田祐子（福井大学附属幼稚園 教諭）、 市村匠也（福井大学附属新教育学校前期課程 教諭）
中学部 篠原未来（福井大学連合教職開発研究科 准教授）、 松井雷英恵（福井大学 附属教育実践センター 客員教授）、 大石橋義治（特別支援教育センター 指導主事）、 赤澤孝弘（福井県教育庁保健体育課 主任）	田原 裕（福井大学附属新教育学校後期課程 教諭）、 林 裕樹（福井市立北中山小学校 教務主任）、 名倉康浩（坂井市立平倉小学校 教諭）
高等部 石井パークマン麻子（福井大学教育学部 客員教授）、 藤岡 泰（福井大学教育学部 准教授）、 室木良子（福井大学連合教職開発研究科 准教授）	細田正幸（セルブあすなろ 代表）、 東 敬雄（福井南特別支援学校 教諭）
全体研究協力者	
近藤志津恵（たけのこくらぶ 代表） 北村 佳子（たけのこくらぶ 指導員）	

11/22（金）福井大学教育学部附属義務教育学校 教育研究集会



国立大学法人福井大学教育学部附属
義務教育学校

第2回 教育研究集会の御案内 (第2次)

研究主題（第Ⅰ期）

自律的な学びへのイノベーション
探究するコミュニティを培う

研究副題（2年次）

学びのつながりを紡ぎ、社会を創る力をとらえる

期日 令和元年11月22日（金）

会場 福井大学教育学部附属義務教育学校



本校HP QRコード



文部科学省指定研究
「社会創生プロジェクト」
研究開発校

OECD Education 2030
OECD ISN 2.0実践校
探究チーム福井

主催／福井大学教育学部附属義務教育学校
後援／福井県教育委員会 福井市教育委員会
福井県小学校教育研究会 福井県中学校教育研究会

前期課程児童・後期課程生徒 発表 (9:15~10:05)	
「社会創生プロジェクト」など、子どもたちが自身が感じている学びをポスターで発表します。	
公開授業Ⅰ (10:20~11:05/11:10)	
教科/学級/授業者	主題 / 「単元・題材」 / めざす授業
国語 5年1組 授業者：野坂 友美	長い読み聞かせができた物語の秘密を探ろう 「大造じいさんとガン」 本作品が70年以上もの間、読み聞かされてきたのはなぜだろう？大造じいさんと鷲鷹の戦いを鮮やかに描いた表現のよさに着目しながら心情や場面の様子を読み味わい、自分の読みを友達に投げかけ、話し合いながら探っていく。活動を通して新たな物語の魅力や物語の読み楽しさを感じていく授業。
社会 6年2組 授業者：宮本 泰成	エドトーーク！長期政権「江戸幕府」の秘密 「江戸幕府と政治の安定」 江戸幕府が約260年もの長い間続いたのはなぜだろう？幕府体制の確立の理由と「大義名分」(寛政の改革)「鎖国政策」の3つの施策を比較・検証し、江戸幕府の政治の安定に果たした役割の大きさを評価判断していく。江戸時代と現代をつなぐ「政治」への見方・考え方を仲間との協働でとらえていく授業。
算数 5年2組 授業者：藤川 洋平	箱の中の立体は何だろう？ 「角柱と円柱」 この形どう作るかな？自分の想像から導かれた情報をもとに、粘土や竹ひごなどの材料を使って立体を作っていく。子どもたちの作った立体には、それぞれの図形に対する見方が表現されている。協働で立体の見方について探究していく中で、図形に対する見方や考え方を広げていく授業。
理科 3年2組 授業者：澤本 恵	大きく響け みんなに届け 見える音 「音を出して調べよう」 大きい音を出すにはどうしたらいいだろう？音の速い遅いには何が関係しているのだろうか？子どもたちは、いろいろな音を出し、観察し、比べることで音の出る仕組みを探っていく。音が見える手回し楽器展覧会を行うことで、見えるい音の正体を探る授業。
音楽 4年1組 授業者：小林 千恵美	民謡のせんりつの特徴を探ろう 「いろいろな音楽に親しもう」 民謡ってどんな音楽？民謡を聴き、感じ取ったことリズムや音階との関わりについて考えていく。各自が選んだ民謡を協働で表現して紹介する授業。
造形 2年2組 授業者：浅井 綾子	身近な材料から世界に1つの楽器をつくりだそう「ときめきコンサート(工作に表す)」 音はどのように生まれるかな。集めた材料に「叩く」「揺る」「こする」などいろいろな動きをかけながら音の出し方や仕組みを見つけていく。音が鳴る仕組みや音の感じからイメージで色や形で飾り付けをして、音が出せる自分だけの楽器をつくっていく授業。
学校保健 4年2組 授業者：水野 恭子 若本 佳子	これまでのわたしとこれからわたし 「育ちゆく体とわたし」 わたしたちの心と体はこれからどんなふうに変化していくのだろうか？人間の思春期における心や体の変化を、動物の生態と照らし合わせながら探っていく。思春期の変化を自分のこととしてとらえながら、自分自身の成長を前向きに受け止め、よりよい成長できる生活を仲間と共に目指していく授業。
体育 1年1組 授業者：市村 拓也	速くへ 狙ったところへ 狙え！ターゲット 「ゲーム(ボールゲーム)」 どうしたら速くへ投げられるの？どうしたら狙ったところへ投げられるの？アドバイスをし合いながらミッションクリアを目指して、チームを様々なボール投げゲームに挑戦していく。協働して課題解決に取り組み、遠投距離や正確性などの技能力を培う授業。
外国語活動 3年1組 授業者：神野 朱里	外国には無い日本らしいものを紹介しよう 「What's this?」 外国の人に日本や福井のものを伝えるとき、どのように伝えるといいだろう。得意なものを活用しながら、自分が紹介するものの特徴を説明するための英語表現を協働で探っていく。Show&Tellを通して、相手に英語で語り続け伝える授業。
技術 7年B組 授業者：齊藤 幹郎	先輩から学べ！匠の技 「材料と加工の技術」 家々愛される作品を作るにはどうしたらいいだろう？子どもたちは、学校に珍藏される作品(チョーク入れ、組、ベンチ)の材料の選択や構造の工夫点を協働で探究していく。完成までの作業に見通しを立て、自分がイメージする作品を作りあげていく授業。
家庭 8年B組 授業者：八田 玲子	見つけよう、自分らしい衣生活 「衣生活の自立」 着なくなった衣類はどうやって捨てるのだろうか？衣類の行方を追いつながら、ゴミ問題やエコロジーの消費など、衣生活がもたらす社会への影響について探っていく。衣類の役割を理解しながら、自分らしい衣生活について考え、実践することを目指す授業。

受付	印刷/写真/児童・生徒発表	公開授業Ⅰ	公開授業Ⅱ	昼食	分科会	全体会 / シンポジウム
8:10	8:50	10:05	10:20	11:05/10:11:20	12:10	13:00
						14:15
						14:30
						16:30

公開授業Ⅱ (11:20~12:10)

教科/学級/授業者	主題 / 「単元・題材」 / めざす授業
国語 7年C組 授業者：島田 裕美子	「僕」が見た「戦争」、「弟」への思いを探る 「大人にならなかった弟たちに……」 「僕」にとって弟「ヒロユキ」とはどのような存在だったのだろうか？作品の背景にある社会、文化、歴史をどのように探ることが、「僕」の弟への思いやその時代への思いを読み深めることにつながるのかを仲間とともに探っていく。現代において、この作品を読み意義を考え、作品が内包する価値を読み解き、自分のものの見方や考え方を広げていく授業。
社会 9年A組 授業者：坂東 由美	みんなの願いをかなえる福井市予算案を提案しよう 「地方自治と私たち」 「住みよさランキング」が上位なのはなぜだろうか？願いをかなえるために財源の最速かつみちを仲間と協働で探る。予算案作成を通して、これからの福井を提案する授業。
数学 8年B組 授業者：柳本 一休	図形の美しさの秘密を探ろう 3 「図形の性質と証明」 図形の対称性や合同に美しさを感じてきた子どもたち。どうすれば図形は美しくなるのか、美しさからの「ずれ」に注目し、辺や角についての因果関係をAならばBと表現していく。これらの関係をどのように証明していけば証明がつけられていくのだろうか。立方体の面上にひし形を描く体験から、証明の仕組みを探究し、論証に必要な図形に対する見方や考え方を培っていく授業。
理科 7年A組 授業者：佐々木 康順	見えない世界の「見える化」プロジェクト！ 「身のまわりの現象」 自分たちの手で虹を作り出すにはどうすればいいのだろうか？実験を通して、身近な物理現象の解明には作図や観測、数値化が必要であることを感じ、光や音、力の規則性を協働で見つけていく。自分たちの手で身近な物理現象を再現していくことから、科学的に探究する力を育てていく授業。
音楽 9年B組 授業者：柳 博恵	日本と世界、そして自分の声の特徴を探ろう！ 「歌い継ぐ 日本」の歌「味わおう 世界の諸民族の音楽」 各自が選んだジャンルの音楽は、いつどこで、なぜ生まれ、誰がどんな声で歌っているのだろうか？音楽の歴史を踏まえ、音楽文化についての理解を深めるとともに、鑑賞活動を通して民族音楽や伝統音楽の特徴を探っていく。発声や声の音色などに着目し、協働で声による表現の可能性を広げていく授業。
美術 7年B組 授業者：栗畑 未来	アニメーションで私たちの「福井」を伝えよう 「絵や立体が動き出す」 自分たちのもっている福井のイメージ、どう表現すると伝わるかな？仲間とイメージを共有しながら、自分たちの表現に価値付けし、一つの作品をつくりあげていく。形や色、音を使って、ストップモーションアニメーションで表し、社会に発信していく授業。
学校保健 8年C組 授業者：綿谷 明菜	喫煙者ゼロキャンペーンを考えよう！ 「喫煙と健康」 健康について関心が高まっている現代においても「たばこ」がなくならないのはなぜだろうか？言葉あて一列などと言われる「たばこ」。新たな喫煙者をゼロにするためのキャンペーンを協働で考えることで、喫煙が及ぼす社会への影響を知り、自分や家族の健康について考えていく授業。
保健体育 8年A組 授業者：田原 裕	チームの特徴をいかした戦い方を探ろう 「球技(バレーボール)」 どうすればあつたチームから得点したり失点を防いだりできるのだろうか？今もっている知識や技能に加え、新たに戦術や作戦に目を向け、チームの特徴をいかした戦い方を仲間と協働で探っていく。互いの戦い方をゲームで表現することを通して、バレーボールのもつ特性をつかんでいく授業。
英語 9年C組 授業者：藤井 智加	Who is your power? 「Unit 6 Striving for a Better World」 誰が自分を変えてくれているのだろうか？アウンサン・スーの半生を読み解き、彼女の変えようとしたものについて協働で探っていく。仲間や文章と対話し、9年間で学んできた多様な表現を活用しながら、自分を変えてくれている人への思いを伝え抜く授業。

分科会 (13:00~14:15)

教科ごとに分科会を開催します。公開授業における子どもたちの学びの見取りをもとに、教科の目指す本質的な学びについて語り合いながら、職務教育課程における協働探究カリキュラムの在り方について参加者全員で協議していきます。

全体会 (14:30~16:30)

校長挨拶 大山 利夫
来賓挨拶 福井県教育委員会
研究概要 前期課程研究主任 五十嵐 洋行
シンポジウム「協働探究サイクルが生み出す子どもの学びをとらえる
～全教科・領域で培う資質・能力～」



**テーマ「協働探究サイクルが生み出す子どもの学びをとらえる
～全教科・領域で培う資質・能力～」**

シンポジスト
秋田 喜代美氏
(東京大学大学院教育学研究科長 教授)

白水 始氏
(東京大学高大接続研究開発センター 教授)

柳 博恵
(福井大学教職大学院 准教授
本校後期課程 統括研究主任)

コーディネーター
木村 優氏 (福井大学教職大学院 准教授)

「21世紀を生き抜くための資質・能力とは?」「資質・能力を評価するとはどういうことなのか?」全教科・領域における9年間の協働探究を通して、どのような資質・能力を引き出すのかを子どもの学びの姿からとらえます。ご来場された方と一緒に、公開授業などでの学びの様子をもとに、これからの学校教育の在り方や使命について考えていきたいと思います。

参加費 2,000円 (資料代含む、昼食代は別途)
申し込み方法：本校HP上のフォームから必要事項をご記入の上、
令和元年11月8日(金)までにお申し込みください。
右のQRコードからも直接申し込みができます。

問合せ先：担当：柳本
〒910-0015 福井県福井市二の宮4丁目45-1 Email: fukufuzokugimu@gmail.com
tel 0776(22)6985 fax 0776(22)6703 HP: http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-g/

申し込み用 QRコード

平成30年11月30日発行！本校出版本
「福井県 プロジェクト型学習 ～未来を創る子どもたち～」
福井大学教育学部附属義務教育学校教育実践研究会 著 東洋館出版社 2,100円＋税

プロジェクト型学習の学びを通して子どもたちが語る学びとその様子を本校職員が書き表し、これら実践の価値と意義を教育研究者が理論付けした、実践と理論の往還を示す書。

主な執筆 秋田 喜代美氏 (東京大学)
松本 健一・柳沢 昌一・木村 優・岸野 麻衣 (福井大学)

OECD日本イノベーション教育ネットワーク 代表 鈴木 寛氏 推薦 (博文)

supported by OECD Education 2030

入試情報

令和2年度
福井大学大学院
福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学 連合教職開発研究科
入学試験に関する日程

第1回入学試験
令和元年11月23日(土)

出願期間
令和元年11月1日(金)
～7日(木)

ガイダンス
令和元年11月16日(土)
15時～16時30分

第2回入学試験
令和2年2月8日(土)

出願期間
令和2年1月24日(金)
～30日(木)

ガイダンス
令和2年2月2日(日)
14時～15時30分

第3回入学試験
令和2年3月7日(土)

出願期間
令和2年2月17日(月)
～21日(金)

ガイダンス
令和2年3月1日(日)
14時～15時30分

《大学院説明会》

秋期説明会 令和元年10月26日(土) 13時から
場所：教育系1号館1階大会議室

冬期説明会 令和2年1月11日(土) 13時から
場所：福井大学文京キャンパス アカデミーホール

Schedule

10/19 Sat 月間合同カンファレンスB日程
10/27 Sun 月間合同カンファレンスA日程
11/9 Sat 月間合同カンファレンスA日程
11/23 Sat 令和2年度福井大学連合教職大学院
第1回入学試験

10/26 Sat 福井大学連合教職大学院 入試説明会
11/16 Sat 月間合同カンファレンスB日程

【編集後記】

あわただしくも熱気あふれる夏の集中講座を終え、久しぶりの月間合同カンファレンスが予定されていた10月12日、大型で非常に強い台風19号が日本に上陸し、各地に甚大な被害をもたらしました。この度の台風で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げますと共に、被害を受けられた皆様方の一日も早い復興を願っております。子ども達の生活が一日でも早くまた笑顔あふれるものとなりますように。(S)

教職大学院 Newsletter **No.126**

2019.10.19 内報版発行
2019.11.19 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp